

ハとガについて

ヘルデル・ エリサベツト

1. ハの種別 (註1)

ハという助詞は格を表すのではない。ハでマークされる要素を他の物事と区別して取り立てるのであるから、その要素は主語だけに限っていない。このレポートではガに対比できるハだけについて書くことにした。だから、次の種類にはそうでないハも含めているが、ここでは無視する。

絶対的取り立てを示す主題のハがある文脈を要求する。聞き手にとって明かでない人物・物事は主題になれないからである。従って、ハでマークされている要素は文脈(例1)、外界(例2)または総称名詞で(例3)聞き手に分かる。

例1 太郎ハ学生です。

2 それハ私の本ですが …

3 犬ハ動物である。

相対的取り立てである対比のハはそういう文脈を全然要求しない。

例4 雨ハ降っていますが、雪ハ降っていません。

備考*従属節で主題のハはガになり、対比のハはハである。

*参考書にはあまり出ていないが、特に否定文にハがよく現れる。

*一つの文章に二つのハが現れると二番目のハは対比の解釈しか取れない。

*主題のハでマークされる物事・人物はもう知られているから全部省略してもいい。

2. ガの種別

一般的にガは主語を表す助詞と見られているけれども、主語を表さない場合もある。それに、助詞の存在を認めない学者もある。そのうちの人に鈴木重幸氏もいて、名詞の偏差のガ格であるという。

総記のガはこのところで問題になっている事柄の中にXを選んでXについて述べるのである(例5)。あるいは、Xを紹介するものである(例6)。

例5 魚と肉と、どっちがいい？

魚がいい。

6 昔々、おじいさんとおばあさんがありました。

中立叙述のガは総記のガと同じように主語に付く。意外とする事柄の観察である。

例7 あら、雨が降っている！

時に、総記と中立叙述の区別が非常に難しい。たとえば、例8の意味は文脈によってちょっと違うだろう。

例8 田中先生がなくなりました。

「だれがなくなりましたか」という質問の答えなら総記のガである。しかし、「大変です、田中先生がなくなりました！」という場合にやはり中立叙述のガである。

また、述語の性質を見て判断できることも多い。総記の述語は多く恒常・習慣的状态であり、中立叙述の述語は多く一時的状態である。先に述べた例はあまりはっきりしていないが、次の例9が総記であるのは述語の性質から見て当然であろう。例10は中立叙述であろう。

例9 太郎が学生です。

例10 お父さんが帰ってきた！

目的語を表すガは時に無視されているらしい。「好き」、「上手」、「嫌い」などでヲを使うと文法的ではない。他方では、可能・能力を表すレル・ラレルという語尾と「欲しい」とタイという語尾がヲもガも取れる。

例11 私は刺身が好きです。

12 水が飲みたい。 (註2)

備考*先に見たように、ハの場合に主語・述語の関係は題目一解説である。ガの場合は主語と述語はよく結ばれて一つの単位としてとらえられる。金田一春彦氏が指摘したように、「お金がある」という文章は「お金持ちだ」と同じであるが、「お金ハある」というと一つの単語になれない。関係節でガがノになれることも同じではない

だろうか。古典語のガは現代語のノに近かったのである。

3. 主語化と主題化

次の例が主語化と主題化のプロセスを見せてくれる。

例16 象ノ鼻が長い。

17 象ガ鼻が長い。

18 象ハ鼻が長い。

例16のガは中立叙述のガである。例16が例17の形になるのを主語化という。新しく現れたガは総記のガである。総記でない要素の場合は主題化が起こり、例18になる。その結果、例18の深層構造は目的語のガの文の深層構造と全然違う（註2の例15参照）。主語化・主題化というプロセスに色々な条件があるらしいけれども、そんな詳しいところまではまだ研究されていない。

4. ハとガの文章の種別

措定文 XハYだ

Xは指示対象で、YはXの性質である。XについていえばYという性質がある。ハは主題の総称名詞指示のハである。

例3 犬ハ動物である。

しかし、入れかえると非文法的な文になる。

例3A* 動物ガ犬である。

指定文 XガYだ

XもYも指示対象であるが、Yという性質を持っているのを捜せば、Xであるという構造である。ガは総記である。

例19 私ガ社長です。

指定文を入れかえると倒置指定文になる。

倒置指定文 YハXだ

XもYも指示対象で、主題の文脈指示のハがある。Xを捜せばYであるという形をもっている。

例20 社長ハ私です。

指定文と倒置指定文は表面的に同じに見えてもそれぞれの性質がかなり違う。しかし、指定文であるか倒置指定文であるかがよく判断できない場合もある。例21参照。

例21 話しているのハだれですか。

倒置指定文としての例21は指定文の例22を要求するだろう。

例22 だれガ話しているのですか。

ここまで分析した文章は全て名詞述語であったが、もちろんそれには限らない。動詞述語全種別を述べるのは無理であるから、一番簡単な文章種別にした。それに、この分野の研究はまだよくまとまっていらないらしい。

存在文 どこかニ何かガある (焦点: ガ)

所在文 何かハどこかニある (焦点: ニ)

所有文 だれかニ何かガある (焦点: ガ)

「2」でもちょっと触れておいたが、動詞述語の場合に述語の性質をよく区別しなければならない。

5. ハとガに基づく概念

既出・初出

すでに話に出た要素にハが付き、初めて出る要素にガが付くというハとガの分布の解釈

である。例6はその通りだったが、例23は矛盾するからその解釈では足りないのである。

例6 昔々、おじいさんとおばあさんがありました。

23 太郎君と次郎君と、どっちがやった？

太郎君がやった。

旧情報・新情報 または 既知・未知 (註3)

聞き手に既知である旧情報はハでマークされ、未知である新情報はガでマークされる。「知っている」というのは何かが問題である。話し手は聞き手の意識を想定するのである。先の既出・初出は新情報・旧情報または既知・未知という概念の一部である。既知は同定可能で、未知は同定不可能であるといってもいいだろう。にもかかわらず、例24の未知要素は同定可能である。実をいえば、全然未知のはずはないだろう。

例24 君が責任者だ。

総記のガの解釈で例24はおかしくないから他のモデルが必要であろう。(註4)

例24のようでない文では既知・未知という解釈に問題はないから、一般的にどの文でも三つの可能性がある。(註5)

既知 ハ 未知 (主題のハ)

未知 ガ 既知 (総記のガ)

未知 ガ 未知 (中立叙述) (註6)

前提・焦点(の命題)

例24をよく説明するために数字式のような書き方をすれば、次のようになる。

24A Xが責任者だ。 (前提命題)

B X = 君 (焦点命題)

例24は指定文で、倒置指定文の形で例26になる。

例26 責任者ハ君だ。

26A 責任者ハXだ。 (前提命題)

26B X = 君

(焦点命題)

このモデルの欠点は、中立叙述の文をよく説明できないということである。だから、まだ完全なモデルはできていない。

簡単にいうと、言いたいこと、聞きたいこと、つまり、中心になる要素にガが付く。即ち、次の例で、特別の物について話しても、中心になるものは疑問詞であるから、「これ」はハしか取れない。

例27 これハ何ですか。

6. 日本語の他

日本人自身はハとガに基づく概念は日本語だけの特徴であると思うらしい。そうだったら、外国人に教える日本語教育でどうしてハとガの問題を無視するか分からない。この面で筆者は広島大学の日本語・日本文化コースも絶対なおしてほしいと思う。しかし、ハとガの概念は本当に日本語だけであろうか。

韓国語でぴったり対応する助詞のセットがある。それだけでなく、日本語からもっと離れている言語にも同じ既知・未知ということがマークできる。久野氏が指摘したように、英語では抑揚、語順、代名詞、の用法によってマークできる。筆者の意見では、特に冠詞が大事な役割をする。母国語のオランダ語では、英語のように、抑揚、語順、代名詞、冠詞などが日本語のハとガの役割をするらしい。世界中の色々な言語を比較したら、この概念の理解を深められるのではないだろうか。

- 註1 大体の用語は久野氏の用語である。しかし、「対比」の代わりにかれはよく「対照」という言葉を使う。
- 2 どの動詞・形容動詞・形容詞に目的語のガが現れるかをここでは問題にしない。しかし、この場合のガを目的語とするべきか主語とするべきか明かではないと思う。次の例13・14・15のガを比べたらそれぞれ主語・主語・目的語とする人が多いだろう。

例13 これが面白い。

14 私はこれがおもしろい。

15 私はこれが好き。

例14と例15の違いは何であろうか。久野氏によると、共通点は主観性にあるそうで

ある。従って、そのガの性質は客観的な「これが赤い」という表現と違うという。ところが、主題のガと目的語のガが同時に現れることができる。例15を総記の「私ガ…」に替えても文法的に正しい文章である。

- 3 久野氏は「古いインフォメーション・新しいインフォメーション」という。
- 4 このモデルは「ケーススタディ日本文法」と「日本語百科大辞典」にしか出ていなかった。
- 5 大野晋氏によると、「既知 ハ 既知」ということも可能である。たとえば

例25 ばかハばかだ。

- 6 対比のハはどちらであるかについては書いてなかった。

参考書 (著者名50音別)

| | | | |
|---------|-----------------|-------|-----------|
| 大野 晋他編 | 『日本語相談』 | 朝日新聞社 | 1989 |
| 大野 晋著 | 『日本語の文法を考える』 | 岩波書店 | 1978 |
| 金田一春彦著 | 『日本語』(上)(新版) | 岩波書店 | 1988/1989 |
| 金田一春彦著 | 『日本語』(下)(新版) | 岩波書店 | 1988/1989 |
| 金田一春彦他編 | 『日本語百科大辞典』 | 大修館書店 | 1988 |
| 久野 著 | 『日本文法研究』 | 大修館書店 | 1973 |
| 寺村秀夫他編 | 『ケーススタディ日本文法』 | 桜楓社 | 1987 |
| | 『日本語』(人生読書シリーズ) | 河出書房 | 1987 |
| 鈴木重幸著 | 『日本語文法・形態論』 | むぎ書房 | 1972 |
| 外間守善他編 | 『日本言語学要説』 | 朝倉書店 | 1984 |